里見八犬傳 拾六篇 巻三十七

八 13
3416
88

13
341
88

十六編 南總里見八犬傳

二十七

松亭
勝若院

南總里見八犬傳第九輯卷之二十七

東都　曲亭主人編次

第百六十回

殘兵双と奪ふく窮君を賣る
水軍艦と寄せく敗將を載せ

再説犬田小文五郎悔順が寄隊第一番の猛者と呼ばれ。上水和四郎東二と。馬を相寄せ棒を合せく。他雜兵もせぜ戰ふ程ふ東二竟ふ脇疲れて。連ふ嘯ぶのみ既ふ危く見えしを。又寄隊の陣中より。一個の騎馬武者馳出るを。正見れば是も亦東二ふ。劣らざるべき大漢ふく。蚺眼虎鬚骨逞しく面黑ふ。身ふ皂莢紙の鎧擐て腰ふ三尺の大刀を跨へるふ大鐵を執もりける。面魂苛歩く。銀の左纏の鍬額。一く胡意鬼を被ぎり。恣而這猛者馬を找めく。近つく隨ふ聲震立て。上水碧。我代ん。拳を東西の千士萬卒。今我赤熊如牛大猛孰が。本事を見よ。と喚く。

馬を馳て鉞を振回し〻小文五郎を只一擊に斬んとせ。既に〻大田小文五郎。左右に敵と受れども毫も怕る氣色なく。左を拄て右に中り受て流〻流あてに擊る。神出鬼没の手を盡せど人馬の進退一致して。両敵の果て様を打捧に遣返す。生木の棒に翩々と宛虚空に閃如く。孰を其と分ぎ〻に鬪戰闌ければ寄隊の士卒も里見の諸兵も呆然として醉るが如くなれど空くして長覩て在り。低而上水和四郎い今一雄の帮助を仰られ。疲労れ氣力を励し〻相夾て擊まくれども。小文五郎。這両敵と左右に受。精神始に弥増して寔に鬼る勢に誰か勝うあらんや。碎言が唐山三國の初に比異例の刺史袁紹が萬丈無當と負くと雖も。勇士顔良文醜が関雲長と戰ひも低やと思ふ奮激突戰細に名状べき。既にして大田小文五郎這両個の勁敵を思ふの隨に疲労し〻甲乙俱に腕の乱る〻透をゆるし〻と嘆ぜく擊る棒を東ニ拄て遑く鉞くも頭を磯と擊れて頭鎧も骨も碎けん。苦と一聲叫びも果ず馬より揵と墜る時。小文五郎が生木の棒も中より弗毀と折て〻小文五郎早く東ニが鐵撮棒の秘を抓て。地上に落さじ命を留る程しもあらせず赤熊猛勢。明輩の仇逃さじと叫び我ら鉞の〻く犬田の頭を擊んとするに高も透をゆるさじ。小文五郎馬上に身を反て。猛勢が擊る鉞兒。寛外れて〻小文五郎が無しる馬の髪龍を。頭と托地と斫落す。那時遅し。這時速し。小文五郎は我馬の斫られて仆まんとする時仆る果ず身を飛して今東ニに放れてありける馬に乗移り〻。那八角なる鐵撮棒を振上げ見せじ赤熊如牛太猛勢の右の肩尖項骨被て力に儘して擊〻ふ〻して堪在る〻猛勢が肩骨摧けて握り持る鉞兒と落して人馬共倒に地上に揵と擊伏られく。そが伏息は絶ぬけり。然ば犬田が這日の拵に敵も自家も目を驚〻く其緒を接んと欲る者今。登時犬川荘介執る麾をうち揮りて鬼れくと上

卒と找る軍の潮前時こそとけれと勇む登桐山八郎満呂復五郎再太郎安西
就れいへけらえ雑兵仂武者ホ至るまぐ皆洪水の衝く如く又大山の崩る像
く吐と揚こ喊の聲と俱ホ前後を相爭今面も振らを鎗の尖頭を揃て寄
隊の陣中へ突蒐り衝頽も勢ひホ誰ら中るべ元寄隊い萬夫ホ撓れりと然ーも
負ーく思ひる上水和四郎赤熊如牛太と大田ホ敷ませく力と喪ひ勢ひ折けく
忙然こうーホ又大川ホ先と駈れく始て事の起りーどく驚ル乱れて辟易も一
陣既ホ敗れて大将自徹原徹久も又立直せとこ沼ど返せくと吸るのミ逃ホ士
卒ホ誘引れて頽れく後陣へ辟れ蒐れば朝良も憲重もあろ什麼とんろホ制
むくもあらぬれば竟ホ摠敗軍ゆどるりホける然が里見の二大士い逃る寄隊を遠く
迂ぬ程ょく士卒を喚返させく八馬を駆へく五本松ホ在り敵の叢ホ陣
営ホ入替りと士卒の軍功を尋るホ登桐山八満呂親子安西就れ仂の餘も

諸士ホ分捕まるれども大田ど那二勇士と敷る果て寄隊二萬五六千の胆
竈と掘ぬる其武其功と及ぶ者あらぬ莊介あれを嘆賞て且小文吾ホ
向ひくの為ろ和殿今日の挿れい和漢ホ傷まく沼ぐて是をと敵いけらえ自家
六七千の小勢とと二萬五千の大敵と只一呼吸ホ殺頽せーい和殿一箇の力ホ
依れり我及ざる所ろれども和殿い當陣の上将であるるぐ士卒の為ホ自愛を
始終の勝と思ひゆるぎや縱其功ありとも匹夫の勇を事とて敢士卒ホ讓
るとるく那二勁敵と戰ひゆるいいと危ーとも危ろれ那時倘寄隊の陣ろ寵
近つれて箭を飛ざれ和殿防ぐホ由ろ孔子ホ語道ホ似れども愚意の及ぶ
所ろのミ後の為ろれと理と演て諫れば小文吾听く感服て教諭宜ホ
其理あり我も亦始ろ思ざホあれども那上水和四郎赤熊如牛太い其名
粗ぞる猛者ろれがと将働と村禽い果敢ろく敷れて良干も亦危ろ敵

倘勝に乗るべく今日の閑戦いかゞあるべき勝敗いまだ知るべからざるの故に我已上を
ゆるぎ一臂の力を盡せかしこ敢武士藝を見て誉を求めく匹夫の勇を好むに
ねど和殿の諫い千金なり我衍心を知るに足れり鄙高き今井の戰に和殿殺戮の
て
を禁めるを且進る将卿を赶りて行く寄隊の大軍近づけると思ひ違へを失と
を。みづから敗して副将の席に就きを正使の
上坐を汚せに我も亦今日の閑戦に危殆を見ずして且殺戮を事とせ。徳い和殿に
倍く漫に館の御本意に背くに者に似る。這失を為く那失に易て今より後
徳使の上坐を返しまゐらせ。いざと推薦を。其身は又故のごく副将の席に就
ゆるべ荘公は云云と一番時を推辭られ理の當然に争難く僅に那意に儘せそ
又立者りく正使に做ける謙遜辭讓義ある礼ある人の及ぶ這美事を感ぜ
者を見るるに開き中に登桐良千い悄地に満呂重時と這二天士を評せく大

田は三ヲ力諸天に勝るく且武勇は餘りあれども智に足らざる所あり又大川は智計
あり武勇は大田に伯仲なれども旅胆力は及ぶべくもあらず館は人を知りて良将に
御坐せば田と川との二天士とをく正副の二将に做しめ那餘りある所をもて這足
ざる所を補ふ御軍配なりけるを那二天士はみづから居るを迭に其小過をもて或は
正将の席を讓り或は正将の席を返して其寝敗を士卒に示さば則是忠
臣の真面目といはるべし大川大田が殺伐の一舉は館の御本意に違ふの故に
ゆる敗して俱に衍心と云れども事皆勝利なるに世の人通て衍心を飾らざる
稀なるに衍心なる衍心と衍心とを一つにして憑心なれば意に犬田が今
日の舉動は匹夫の勇と知りながら那使宜しきを敗せる心操を憑心なれば意に犬田が今
呼ばるべしと唱へ感ぜれば重時は正将の上坐を返さんとその
危言に當れりとて稱ける。問話休題。偖而この次の日十二月七日の朝早天に犬川

莊次郎大田小文吾と倶に五本松の陣営に在り。先ず候を遣はして敵の止る処を知まくとするに姑且して其斥候馬を走らせかへりて寄隊は両囲河を背にして南本所に陣をとる。其軍兵初に劣らざる猶二萬四五千もありと。報るゝ莊次郎うち笑て亦小文吾に談ずる義あり。言既に訖く即便登桐山八郎満呂復五郎等諸士を召聚くして寄隊は昨日の戰に痛く敗績を蒙れども猶士卒を喪わず尚搦角の勢ひを張るべし。計るに寄隊は両大将を二萬五六千の大兵あり。自家と他に比べて二分にして其の一にも足るべからず。夫小兵をもつて大敵を破らまく欲するは奇を出すにあらずして何ぞ。敵は一日人馬を息へて明日は必推寄来べし。然れば明日の戰は必寄隊の軍兵を分ちて合期をなさしめ自亂朝良を擒にすべし。登桐生は隊兵五百名を従へて今井の柵へ赴き那里頭人朝経俊故に我計畧を相待へて各其隊の軍兵をわく明日は早夫に墨田川へ赴く。渉るべき勢ひを張るべし。其計策は簡様々々と悄やかに解示せば小文吾も倶に応ずべし。我妙見嶋の柵を守せる士卒は三四百名あり今は那里に要るければ那柵を速に皆火を放ち焼却して其兵毎をもて今井の柵を守せば今まぐ今井の柵に在る所の軍兵も又朝経俊故に従せて墨田河畔に向に足るべし。其を三四百名分ちて和殿の隊に加へよ然らば和殿の隊兵は九百名に及べし。只神速を至妙とす。ちろ結てよと急せば良子は忽然と言葉とも退て従隊兵を待に及ず各足に信せよと云捨て騎馬に鞭を鳴して今井の柵へ走らせける。介程に寄隊は酷く敗績せ折柄南本所の旌を建て散失ける士卒を待に。幾程もなく聚合りて軍兵敢初に劣らず姑且英氣を養ひる其次の日十二月七日両大将朝良自亂は即便憲重亂久等の花黨兵頭を聚合て再戰の意見を問に大石憲重の云く言憚りなく言はゝ我等約莫昨日の闘戰は千葉殿自家の三勢なると上水赤能の勇を負とも

由断よりて敗軍に及べり。然りけれども猶幸ひに士卒に傷損罪なれば敗れざるの故の如し。必明日の開戰に當家先陣に我を用ひ給へ。先度の恥を雪ぐ易くべくやいなと。

たり貌に論ずれば自亂に恥る色を頭に低て默然たり。朝良これをうけて石見が意見

定に今日明日是十二月八日に当り我老館を定正水路より安房の稲村の城を攻捕べし。

と諫より議をめぐり約束の日に至れり。然るに信里に絶る小敵を破難て水陸の開戰

合期せず異日我何をもて老館に見参せん。明日は必我先陣にて那二大士の道を切

べし。宜く隊配を定ゆとのに憲里再議に及ぶ。義里に敵は大勢なれども猶

小心に考へ今宵先間諜児を那這へ遣て敵の虚実を探らせべく且明日奇

兵をのべく二大士に生拘りのいん其隊配は間様々々如此々々に仕らんとの外朝良領

紀く躰て其議に任せけり。偖而其詰朝寄隊の揔大將扇谷五郎九朝良は

先陣さんとて兵頭入間九郎佑啓松山五六郎尚永と先鋒の頭人にて且萬戸

月十字七約益を副とを又宿尻城戸に建隆に雄兵一千を従せく五本松の這方

に茂林中に埋伏て開戰間さん時横鎗を入れよとく是をば諸兵に先そく。

其夜中に密に遣りけりその他は千葉に自亂原亂に後陣として朝良憲里

先陣さんとて揔軍二萬五千餘騎既に十二月八日の朝未明に人馬を繰出さんとす

時昨夕大石憲重が敵の虚実を探れを遣せ間諜見るかの為て報るを

聞くに里見の二大士義任悔順は反く千葉殿の石濱の城を捕んと一萬餘騎を

二隊に分て小文吾悔順は柳嶋より墨田河をうち渉て石濱を攻伐んと又壮

に義任は五千の雄兵を領く尚五本松に在り但是のみならず這地の民皆里見に

従ひく二大士の隊に附んと欲する者尠らざる又千葉孝胤主の里見に諜し合さ

せく日を定て出陣あるべしと。土民の巷談右の如し。敵其加勢を切る剛に厚く伐

破りあらざれば難義に及ぶべしと云其言孰も紛れるければ朝良憲重驚怪てさても

さそもとどりふ躰く運使と走らせて。自亂ふ恁と告れば自亂も亦駭慌くみだりて
朝良の陣営ふ赴て談もなう。ゆくゆく如況い敵の軍配将ふ難義ふ及んとも石濱の
城ふ我宅春あり且幼少の児子さへ在るふ尚萬一の事あらば後悔臍を噬むとも
及ばじ。孝亂ハ風聲のこゝろざし這地ふ出陣せもの地の郷士凡民そのかぎ那隊ふ加ぎ
る其間ふ咱ち柳嶋ふうち向く那里の敵と伐破らん然れども我隊兵をまたうぶ加
勢の士卒を借しめよと。詞急迫く請求れば朝良憲重異議もあるべしと答
て。隨即扇谷の兵頭引船綱一郎師範を頭人として雄兵七千名を授ふ自亂。
尚一人も漏さじと欲りて。衢ふ陣中ふ囚措る相馬郡領将常の隊兵逆ふ柿
八郎足脱ち百十數名を赦して。そもそも従へんと請ひ。朝良則饒ふ是ふ
自亂の隊兵と加勢の野武士上水和四郎赤熊如牛太の送兵と共ふ全慮一萬餘
名を自亂あれを二隊ふ分ちて原亂久を後陣と。恁而千葉介自亂ハ一萬有餘の
士卒をひきゐて先陣ふ馬を找ち柳嶋を投ていそぐ程ふ里見方ふ加入の隊長宿
持儀杖朝經太樟村主俊故ハ昨日大川荘ふ計策を受けしとの朝二隊の兵
一千四五百名を従へ墨田河原ふ進るべしとて。ふ梅三西田の凱遊ふ来ふけ。時自亂迫ふ
これを見て。他ハ必里見の奴ども。墨田河をうち渉て我城を攻んとて来ぬるぞ。
敵ハ勢ひ駈破りて。奴ふ其兵毎ふ。と鞭ち。指示しつゝ馬を走らせれば。従ふ騎
馬も歩武者も皆後れじとうち向ふ其勢ひ極めて急なり。その時朝經俊故ハ逆期
あるを事ふれば敵の近つくを見久りて。今来ぬる敵の旌表ふ月星の花號あれば。何ハ
でも彼ハ千葉介の大川主の計る所毫も錯ぬ這圖ふ入れり。兵毎備を疾立て。
吸ひ共倍ふ敵と逆ふ。鋭丸を飛し。前を射ずして。寄せ立ぬ間を透して。敷ちんと
先。當下千葉自亂の先鋒の頭人引船綱一郎師範ハ。その隊の兵一千餘名を。
魚鱗ふ備へ。矛を被せて。射れども突けども物とも。せず。競ひ。蒐る激波の勢ひ當

小文吾
小文吾小梅
自害を破る

るべくもあらぬに自亂も亦推續いて馬上に麻毛をうち揮りて光度の恥と今の時に
雪めぎへ何をか待ん伐めくと烈しく下知に従ふ士卒五六千名先を爭ふて蕁直に
推蒐る朝廷と俊故は深田を前に茂林を後にして敵の脚を立させじ矢種の
涯り射て斃せども敵は視て餘る大勢なれば朝廷も俊故も其刃尖に挑難し竟に
揔頼に敵らんとも沿処に里見の伏兵三百田の西の方一叢最緻に枯葦の中より一
忽焉と連放つ火銃の音殺く千葉の士卒も幾名狙撃に仆れ白きを見れ
ぬるその隊の頭人登桐山八郎良千は十百に近き雄兵を找せ自亂の背より吐と嘯
く競ひ蒐るに勢も今は負ひ足らぬる千葉は前後の敵に攪されて自亂も
師範も存ず撥と辟き磨きて柱を巡くもあらぬ一を後陣に續き原亂久徒と
見るより隊兵を找めて鐵砲を放蒐々々勝誇りて敵を撃て散せば自亂も師
範も亦その新隊に勢ひを給て前後の敵に息も艱れず短兵急に戰ふ程に又

忽焉と左右に枯葦の中に猛火起りて煙の裏より顕れ出るは是則別人なり大田
小文五吾悌順なる一千有餘の隊兵をひきて亂久が隊の真中を縦横に奮ひ攻破る
一人當千向ふに前なき武勇萬騎に拔萃して人境に入るごとく瞬息間に熟
類せば又良千も朝廷俊故も士卒奔一勇を奮ふて克戰さる者なく朝風酷
く吹展れて樹とも草とも焼き草とも猛火隈なく燃廣がりて逃る寄隊の路を断つ火
花那隊に落蒐れば千葉の士卒は度を失ひて或は撃れて頭顱を喪ひ或は焼
き死に黙り仆れ然らぬ人も落立て亂久も師範も乱軍の中に撃れ狭旦足を知る
者なりけり開が中に相馬將常が残兵なりけり渋谷柿八郎足脱ぎ百十數名なりの
旦禁獄を赦されて當陣に馳入られれども猶自亂を恨らんば始らじと精戰せど
隊其徒と悄々地に商量するやう千葉殿血氣の勇に誇りて敗軍の士卒を饒
さぞこの故に將常主の本陣に沿還して厚く逐電あれ我們に知せて鉄も御

陣ふかく変で惨刻く禁獄せられ却猛可く赦されて今日の役ふ従へども倘又負
ふ向服立れて必しも我毎の首を刎るあだあらんぞ。開戰不の字ゝるるるるべ逃く
他郷へ走んぞと示ふ合せてありけるふ既く敗軍ふ及びくべヨくい風く逃亡て敵の放ち
ふ火ふ裏れ吉い柿八足脱と其徒五六名い後れて兵火ふ路去りあへをせ術ふ及れが風
脇ふ。樹枝の茂ふ濡稟被ぞ。敵の退くを待て処り小程ふ千葉ふ自亂い既ふ
敗軍ふ逮びくるる。身ふ従ふ近臣もら四零八落ふ做りくるべ免れくすと思決めく近
く敵と幾名欲殺拂殺脱て小皐ふ処ふ馬無捨て腹と斫んと坐と占る背ふ張
ふ渋谷足脱ふる奇貨と合笑ゝ。其徒五六名と呟ふ呟く火速の逆心先ゞ這敗
將ふ我生拘りて里見へ降りて功を賣んと計較ゝ謀合せて近つくと沼知ざりける自亂い
鎧と草袒ふ脱棄ゝ短刀晃らと拔持て肚へ突立んとせ一程あるあもぞ足脱ふい
吐嗟とるるふ哭と寄来て組禁て刀と奪ふ推伏せて折畳ゝく両ふを縛らく

○文溪堂藏

畳ーく索を被ふけゝ。その時犬田小文吾悔順い思ふ隨る勝軍ふ兵火ふ既ふ滅
ふ。小梅の道場の門前ふ旌旗騎挑と建させく。士卒の聚合と待程ふ看持朝
經と大樟俊故い千葉の先鋒の頭人引舩綱一郎師範を相敵ふ殺伐い
已とを沼ざるのゝ館の御本意ふあらぐれがとく。首実検と欲せぞ又登桐良千ゆ千葉の
兵頭両三名を射く落せかども開ふ隨ふく。道級を含ぞ反て那原播磨ふ亂久が
十四五固所の深疵を負ふて枯蘆の中ふ仆ふて存ーを心ともるく見出ふとそ儘
巨盾ふ乗せ雑兵ふ舁せて隨即這里ふ彷そ来ゝ。その義を犬田ふ告ーるが小文吾い亂久の
忠戰と憐ゝく准備の膏苔と出ーと與へく。其刀瘡と包ませるどを浩処ふ渋谷柿八
郎足脱い其徒五六名と共侶ふ自亂と生拘りそゝ伏ふ手牢のそ来ゝ則事の趣と
犬田小文吾ふ親ふるやう。已ゝ相馬將常の残兵ゝ。ゝ。ゝ。然れば自亂の乱政非法を
怨る故ふ反忠を仕ふ其義い亦箇様ゝ。と言詳ふ諜告ゝく。倶ふ恩賞を乞ひー

ゑ。小文吾聞くと且歎び且怒ふ堪ねども先朝経ゟ自亂と受捕せ。草祖の上ゟ坐
ゑ。乞と良千を見ゑ。這足脫ゝ逆賊の漏さで捕捕りねとゝ激した指揮ふ
良千ハ応も果ず我隊兵と倶ふ突然と身を起して騒譟ぐ足脫ゝふ走蒐り
打居て一人も漏さず結束りけり。登時渋谷柿八郎足脫ハ其徒と共侶ふ慌て聲を
勇立て我ゝ何等の罪あるゝ欲ず一所ハ里見殿ハ反忠して我大將を生拘て進ら
せられば今日の軍功第一ぞゝんゝ非如然ばりの賞祿ハあるぞとも捕ら多ゝ
せも果ず小文吾ハ聞ゝ大聲高ゝふ登て這白徒大胆ゝ若ゝハ相馬郡領將
常の從兵ぞゝ是我聞相馬將常ハ自亂主の親族ゆゑ則千葉の家臣ゝ若ゝ
是ふ仕ゝ自亂主の陪臣ゝ縱自亂主不仁ふて恨ゝ思ふとも此の戰場ゟ身を
免れて故主將常の往方を尋ゆゑ切てものゝぞゝんふ今其軍敗ゝふ及ば情
ゝも這君と犯て功を賣ゝ是ハ逆逆ふ異ゝぞ傳ふ云ども君ハ君ゝ

ゝ臣ハ以臣ゝぞハ子ハ以子ゝぞ父ハ父ゝぞ抑我
君里見殿ハ仁義を上古と云ゆゑ我ゝも殺伐を敢好ふ為ども倘是をも忍ばゝ
何事ゝ忍ざらん兵毎ゝ其奴ゝを率して首を刎よと言苛高く下知されば良
千の隊兵等羨ゝ思ゝ足脫と其徒と六名を率退け且推並べ則皆其首を
刎ゝ是を自亂に見せふ當下大田小文吾ハ自亂ふ被る赤ゝ親憂ゝ解
捨て恭ゝく上坐ふ推薦ゝ晩坐ゝ思ゝ今日の見參憐れば六絵ゝ普ふ
ゝ在下浮浪ゝ時淺草野路の頭ゝ料ゝ邂逅ふ馬加大記常
武冒嫉奸詐の故ゝ身ハ口ハ竜中の金の像ゝ他ゝ別亭ふ禁錮せられ楚
囚の怨ふ堪ずゝ登時ハ多ゝ見も知ざゝ同因同果の義兄弟犬飼毛野胤智
復讐の便宜ゝ倶ゝ郷里ゝ脫れ去ゝ過世ゝ里見殿ふ徵れ久ゝ
然而今日ふ至れば今我私の再會ふ悔ゝ和君ゝ悄地ふ石濱ゝ還ゝ

けれども。いかゞせん防禦の大任這躰に在り。然が軽に情義を忘れ重に君命を慮るべし。
權里安房へ倶しまゐらせべ。君の我に一介の舊因なきあれども何ぞ情をくめ。
況寡君里見殿の仁者へ臨し賓客の礼をもて迎るべ。その義御心易くそんと理
ぎ義明々地よ慰れが自亂ひよく差慚とそ悃然ると半晌計ありて答ふ言
趣寔に介人我一方の將として逆徒の辱に逢りけり。非德と思へ今ゆゑに死ざる悲
と敵きものを命運の致を所在ゆも右ゆも計れよ。とのひつて嗟嘆に堪ざりけり。當下又小文吾
士卒に下知して寺僧に請かして轎子二挺を借令まく。則是に自亂と亂久を技業
せそ知良千と召て示ゆ。和殿へその君臣二名と今井の柵に移せ。士卒に宜く守り
べし。亂久に深疾と那里に至べ殿師と招疾を縫して且療治ゆ閑にべくも
這餘の事い箇様々々と送も多く宣示せべ良千都てあるる累て遠郷二挺の轎子と
雑兵八名に舁せ。且隊兵に守せそ今井の柵へいそげけり。偖ても小文吾い尚その寺の

門前に在り。躯く役僧を召よせく。寺歸を向へい役僧答く。當山ゆ則禅宗ゆ他
生山一樹寺とふとい。小文吾ゆそ。とんの憑むべ一芙の我い里見の防禦則使
大田小文吾悌順是へ。約莫今日の鬪戰に敵い戰殺の者多くあり自家も傷損る
泥ゆ。倶に是悼むべ。和僧その義を住持に伝へ。這地方の吏役に課て件の屍骸を
當山に聚合て葬りゆるべ。その義い住持に面談もべく。且地方の村正を召よそ必課
もべ。該亂ども大敵に在陣ゆ去向をいそぐ。とゆ宜通達を憑むべ。
且件の埋葬の諸雑費い異日の沙汰に在んその義もあるひへ。とのひつて躯て墨
筆を深へ則證文一通をるを書寫く取せ。卒と。ゆ襲兒を放ちて牽寄を
る馬ゆ。これ乘れが朝經俊故以下の従兵列を平て。弁々と去向い更に犬川を資て赤
朝良を伐破らんとそいそぐ程勇ざる者多りけり。話分両頭。その日犬川莊介義任へ
五千の士卒と三隊に分く。尚五本松の陣に在り。既に朝日の昇る時候一町許推当て

寄来る敵を待つ程に荘介の馬上より前面と東西と瞻仰て満呂重時を召て
宣ふ。和殿の為に心屬ぐ者。去向の左右在る茂林は是一虚一実。何と云ふ者の茂
林ぞ。敏く鳴く鳥の聲空ふ左の茂林ぞ。禽翔らぬ今孰視れば殺氣あるに似たり。
意ふ必是左の方ぞ。敵の伏兵ぞ。然ば今日の開箭ぞ。寄隊佯く逃走る。
我みづから迂敵の人和殿に逃る敵ぞ拘つ。彼茂林と働れかし。必獲あるべけれと諭ぜば重
時あるに感じて。隊兵八九百を引纏く。胡意左の隊へ向。小程ぞ寄隊の揔大将扇
谷朝良。この朝副将千葉自胤。重河を敵と敷き拂せとそ一萬餘騎を分ち
授けて行ぬ。然るでもみづから冬日の軍議ぞ時移りて既ぞ已牌ぞ。
朝良心焦燥て守るが如く里見の隊ぞ千葉孝胤加勢して。その地の民さへ我ぞ叛く。
事の難義ぞ。敵ぞ加勢の附勾間ぞ戻く犬士と敷る捕れとそ。先鋒の頭人入間
九郎佑啓と松山五兵郎時永兼萬戸月十字七約奏る。下知して諸隊を找りけり。

低而佑啓時永約兼。五本松ぞ推寄る。箭丸を飛し敵を乱して。鎗を入れと欲する。
犬川が先鋒の頭人満呂再太郎安西就久。少年なれども噪ぐ慌ぐ。倶ぞ義任の教を
守りて隊兵を励ま進退賢く閉て。開ける諸葛が八陣鞍馬の八流学ぶ。
どもの如く。其機ぞ稱ぞ。老兵勇士是を帯助て連ぞ挑戰ひ。寄隊い
猶も誘引んと。隊憲重が謀り。故意と敗れて逃走れば信重景重。
荘介も亦推續く。諸勢奔一蒐立々々。那里まで追と迂くぞ。登時満呂重時
走る寄隊ぞ自も遣る。九百の士卒を一度ぞ與して。吐と嘗て左の茂林へ二七二十一の綱
入々々連放つ鉄砲の透もあらず。駈立れ目今頭れ少んとする。寄隊の伏兵不意を打
ぬ。什麼と。敬鳥譟ぐ乱れ走る。敢戰ぞ擬勢る。或ぞ敵の火鉄ぞ敷く仆さ
れ或ぞ樹根ぞ跪轝ぐ。已が刀剣を身を傷る。然ば伏兵の頭人なる宿尻城戸太建隆
已が名ぞ負ぞ不覚ぞ。逃て大路ぞ出ぞ里見の先鋒ぞ撞見て前後の敵ぞ中る。

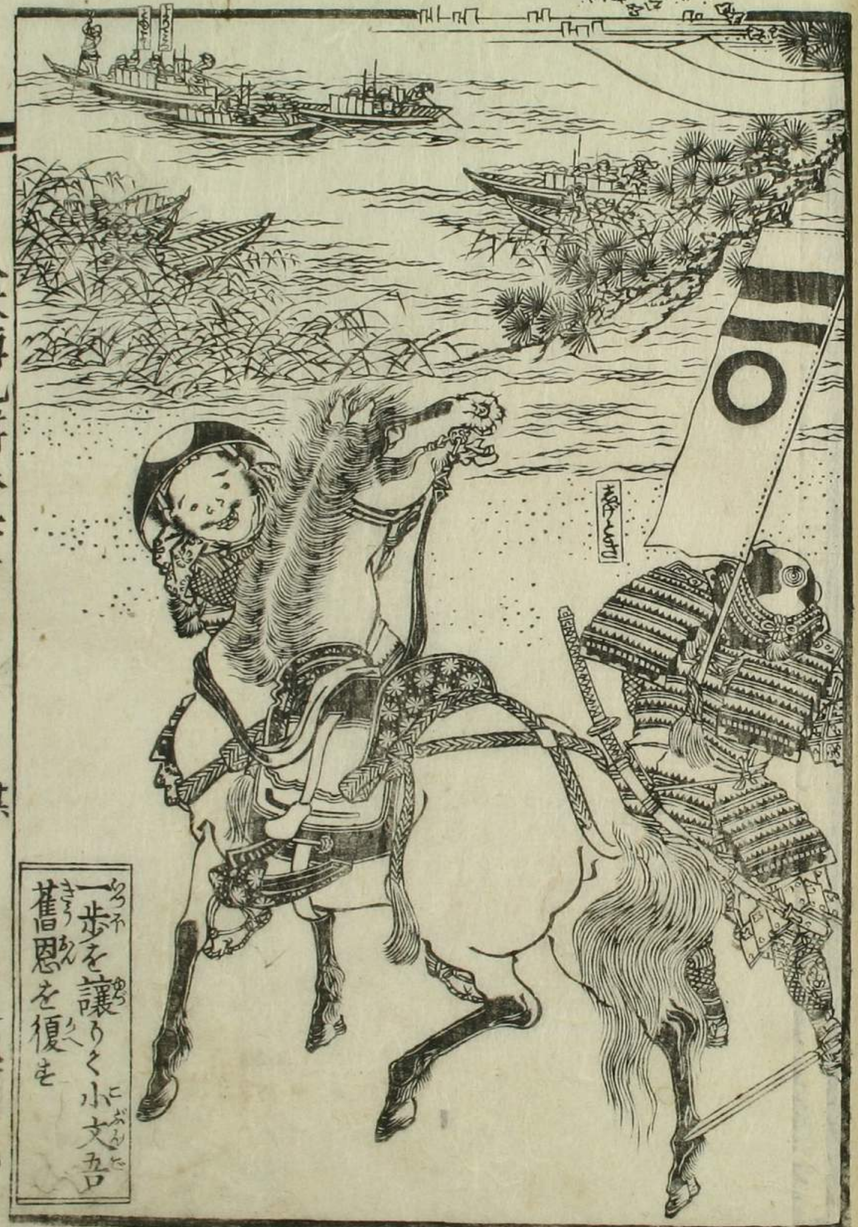
由るくらく乱れて逃走るを復五郎重時八隊兵を駈て迸ふ程ふ寄隊の大将朝良笑
川荘次と桃戦ふその後ふ出けり小程ふ朝良憲重八謀りー伏兵合期せざれ始い佯
アの敗北ゆ意ふ実の敗れふるりく既ふ危くけるを憲重才ふ装直して敵をとがら突
伏せく這里を先途と戦ふ程ふ朝良も倶ふるを盡して馬を東西ふ馳融ー又南北ふ
走らるく近つく敵を射くー仕せ近習の弱輩有名の者倶ふ敵の前面ふ立塞りたく
主を佐けて命を涯ふ戦へども敵八名高る犬士の一人文武兼備の防御使ふ誰々く
雄飛せん主客の勢ひ地を易て寄隊八防ぎ難く折るる満呂復五郎重時八敵の伏兵を
迂蒐く樹間立潜ひ直推ふ件の茂林より捷径を走りく早く寄隊の陣の後の方ふ
出ーて逃る伏兵を迂捨く九百有餘の隊兵をりて疲れー寄隊の背より操合せて
攻さけるを足ふを朝良憲重八士卒ヨく落亡く駈過る杪の像く隊疎落ふ倣ー
朝良ふ辛くー七一方を殺披ひて両国河を投く逃走るを荘次も猶脱さでと。

満呂安西ふと先ふ找めく柱る敵を伐る程ふ初逃る寄隊の伏兵宿尻城戸
次建隆八其隊兵一千餘名と共伯ふふの時ふ遂く返ー来る先度の恥を雪んと
や思ひけん憲重の隊ふ加りく技ひと倶ふ戰ひけり是ふ依りく氣力と疲る大石憲
重入間九郎松山五六萬戸月十字七ふ八倶ふ朝良を延さんとて猶残兵と奬ー
斉一死力を竭ーて其の間ふ寄隊の大将五郎九朝良八絶ふ従ふ近習八九名騎
馬の左右ふ相立せく落て両国河原ふ来ーけるふ其ふる野心の者の所為ふ架なる
船橋八断流されて船一艘もあらざりーく朝良八近習と倶ふ什麽とかるふ
呆れて馬を駐めく四下を遥ふ見るれば浅草河の方ふーて二隊の軍兵出来まり
是則別人ふらず犬田ず先鋒の両頭人猶持傍杖朝經と大樟村主後故八既ふ
小梅を退陣の中途ふて又這寄隊敗軍の風聲早く伝へるば落ゆく敵を漏さず
とく路を料りて今六の河原八連るふ馬を走らる。其兵一千四五百許倶ふ前面を

うち見るに両岡の河邊より主僕と乗り合せ騎馬と歩立の武者八九名渉を求めてあすらぶ他い必敗軍の落武者に疑ひ。好物欲と隊兵を找めく。莫奪直に廷逼る。弊ひ死餓る虎魄の兎に逢るに異ならねば。朝良主僕驚怪るう。兎る死に物ふ。只戰殺と思ひ決めく。馬を其方に推向く。寄来る敵を待ひ程に忽地東北の相距ること二三町許る。田中の茂林の裏より一頭れ出る一隊の軍兵あり。亦一千五百許。其隊の將の騎馬の頭に颯と推建る旌に矢竹の花蹄あり。北越庁貝の軍代稲戸津衛由充と寫せ文字見えぬ。朝良主僕合笑く。又活ぶ。

欺ひの心を俱に勇み。然べ朝經も亦俊故も遥かの旌旗の文字を讀みて他へ是隊誉く。犬川大田の恩人を遮莫今いも我私の遭際るに君の為に這闘戰に由充と戈を饒さんや。兵毎桟めと競ふく蒐れば由充は先鋒の頭人妻有復兵荻野井三郎俱に隊兵を相找めく。刀光より火出るまで。入乱れて戰ひ。登時。

稲戸由充が馬上に聳立り立てなほ扇谷の人々に向ふ。在下思ふ。これ權且這頭に退陣を。風寒の疾病を養ふに果て危窮の御役に達ひ。辰巳の河邊に船を入れ今這敵を咱ふに任せて。疾御曹司に俱に深川の海畔へ赴く。船を求めく渡さ。あ。と叫れども朝良は今更に捨ていそぐ。然る僻事成せ。兵毎續げと馬を找めく。由充の陣中に馳入りて力を勇て。其闘戰を資助ける。浩怒満呂復五郎重時。大石憲重以下の敵に戰ひ既に克ぶ。又朝良を追伐んと隊兵九百を従へ。尋ねて来る邊に木スワに折ら朝經俊故が隊兵を引く。稲戸津衛由充と闘戰正に闌なるを過に見て左右に找まで馬を間道へ乗走らせく。由充の陣の後より矢丸を飛して敵を乱に破竹の勢ひ急なりければ北兵是に驚ひ慌て後を防ぎ前に攻られ前に中まで後より破られ。前後の敵に度を喪ひ。ヨヨくと河へ追隊まれ或は疾に負ひ命を殞に。乱軍の中に身を躯して。逃去るも亦勘くれば。由充憮然と嗟嘆して。



○文溪堂藏

我始より這敗軍と思ざるふ如くされば今陣殺の覚期の上へ然べとく死をとげんと我偶
あの君ふ倶ーあらん竟ふ拯公果さぬい異日我大刀自御前のさて歎をあらん無人の処へ
退況く津へ求るふ如くことわりと思ふ心を如此ことわりと朝良ふ告げ喘ら諫めく目今妻
有復六と荻野井三郎が残兵なりく立直て敵を防ぐく戦ふ程ふ由元ら心をぶも朝
良ふ倶ーて只六の三騎のみ河原へ添ひて震くも津へと尋て落てやく其路いまぶ我ら
東のくさより忽焉と又赶来ら一隊の敵あり是則別人ら大田小文吾悟順へ雄兵勢
千二三百名士卒ふ先ら馬を走せく近つく隨ふ聲高く那里ら遠ふ由寄隊の大将朝良御
曹司おどあっんぞらむ恁云我ふ里見の防御使大田小文吾金碗悟順ら正ら敵ふ背を
ふせらら主僕疲れ馬ふ任せて那里へと欲落ゆ并力ふ路ふ死者ら返ーて勝負を決
あれと吸りく赶来れい吐嗟とあらうち驚ら見ら今朝良と共倶ふ稲戸津衛由元ふ馬城
佐轉哩と乗旋らて逆ふ小文吾ら向ひてらら絶て久ーら大田生れとふ知ら我ふ是北

越の由元ら我今和殿と敵ふ取りて這里ふく戦殺せんふ素ら望む所ら孔ぞ爭何せん
偶再度の危窮を極めて倶ーまあーせ這御曹司朝良ふい我服大刀自御前の処孫ら
人ら之れ和殿の為我身と倶ふ蜻蛉の命空ーあらん我恩ふ倒ら今日の尻敵ら是
豈見他の本意ふ人ら和殿那義を忘れぞいで一歩を讓らぬと請ふを小文吾ら云ふく
馬を駐めく答るやう開いらくまでもあらぞ往日大川荘ふい報恩ら之舎を避ーと雪れ我
義ーぞ所之ふ恩をあふ便宜をあらふ仇りく恩ら報んや量義ふ必死の尼を恩へ今我防御使の
大仕い那再生の恵ふ在り則和殿の賜ふ恩ふ今我私の恩義をりて何で敵の大将を赶ん
我私の恩義をりて何で敵の大将を赶ん代ふぐ已とあーんやいでくとうひつも服ふ残り
ら二條の弦前を含りやとと弓ふ刺ふく能弯固めて標と射る矢局錯び由元の乗ら馬ふ
脚を射られて嘶ふぐ撞と伏ーま内ひとーと存る程あるあーぐ又二の弦前ふ朝良の馬ふ額と
射られて主共倶ふ轉輾ら由元敬馬ふ立ーて扶けやとう被起せれ幸ふーて差ゆ

ら。朝良は且喜て疼痛を忍び〳〵立ふけの當下犬田小文吾は從ふ隊兵を見かへり〳〵我
馬疲労れ給ふ前も亦盡きう且窮寇は逐べからず。忽地後方ふ騎馬武者ゆ是則別人ゑ。滿呂復五郎重時。當下重時
聲高やうふ答るゆう。犬田主犬田主和君は今憖ふ那舊恩ふ報されてあふ用捨の心あり
とも。唱ゆふ任ねば代りて。赴んと去向路なる江畔ゆくゆよ入る敵の敗將を見捨ていかまさ
めらんや。昔は昔今は今恩も情も時ふ依らの我生拘ると見めへと。喧ふ後れ隊兵。
聚ふを避ーと馬ふ拍れて。莫奪真ふ赴莫れが小文吾。咤嗟。とだりふ喚叱れども。听ふ聞ず。然
あの時重時は既ふ北兵们ふ戰ひ克く。猶朝良を赴んと。則ふ逸早く其隊兵をわく目今
已ふ來ることを。犬田ゑ意表と猜せらべ代りて朝良を追ふけり。ふ程ふ稲戸由充わ
犬田ゑ仁義ふ再生ゑく。朝良を扶拔ゑ。ゆくとゆまゑ遠ゑ。ふ亦復一隊の敵兵の我を
追蒐來ゆるあり。房總防禦使後陣の隊長滿呂復五郎重時あふ在り返せ。と

吸ゆる。其兵約莫八九百名。陸続くして赴逼る勢ひ猛く見えゆ。朝良と由充わ
目と注せう。嗟嘆して。稍龍尾と免れ來て。亦這虎腮ふ逢へ。今いまも是ゆゑ。大刀の
刃のゆん限り。敵を殺して戰死せんふ及ぶと。相奬して立逆へんと。身を構ふ。折
く這江の処々ふ。鼓ゆり立る。枯蘆の中より。快船一艘忽焉と漕ぎ來て。水際ふ
寄せり。其ゑ高師ゑ。喚ゆる。南御曹司ふ御坐ゑ。御伴當も共伯ふ。疾ゑの船ふ乘
ゑ。敵近づきゑ。疾々ゑいそぎゑと。朝良と由充わ。斉ゑ急ふ見ゆて。鄙語ふ
ふ津ふ船の狹ゑふ堪ざれ。敢一句一言の問答ゑ。遑ゆ。身を跳らせ。共伯ふ件の
船ふ乘徒れゑ。高師悼を今ゑ直ちゑ。ゑ漢ゑ。漕ぎを程ーもゆゑ。重時。水際ふ先
ゑ。馬を馳ゆ。赴ゆゑ。來ゆ。既ふ水際ふ。漕碎れゑ。及ぶゑ。あゑ。ゑ。費ゆ
隊兵を見ゑて。那見ゑ。敵ふ脱れゑ。我隊より。人魚の膏油を。ゆゑ。身ふ塗れゑ。ゑの江を
泅ぎゑ。赴ゑ。ゑ。敢凍ゑ。凍ることを。料るふ敵ゑ。高師と共ふ才ふ三人のゑ。波を潛りゑ

那船を歇めく那奴們を虜ふせんもくとひらつも馬より閃りと下立て鎧の袖と帛腿と解
捨んとく惴る程ふ又見る這江の頭る処々の枯蘆の中よりて突然と曹りと出て戰
艦十艘許其艦毎ふ振甲る武者五四十名乗れい都て五百個の軍兵ゆり其艦ふ
建る旗い遮瀾の板より敏く波ふ見く鎗鋒眉尖刀い刺昇る月の影よ似ら然ば
件の艦る士卒們ハ皆朝良由充の乗る快船の前後左右をうち囲て造化精妙
と其ゝ迅く西へ投て漕去りける。あの時且ハ没果て朧々と見えうの漢を長視海
重時ハ且呆れ且送恨ふ沿堪ぎ敵ふ援の軍兵ヨ絶ゑ我身単渡と渡ぎく迂遠偽と
さゝと甲斐やあるこ思る哉と嘆く折ゝ大田小文吾悔順ハ又稲戸由充の安危甚麼
と胸休うねば猶重時を諭さんとて隊兵をゆく迂ゝ返ふけり當下重時ハ小文吾ふ
報るやう。在下剛才朝良ふ迂近つんと存る折始ハ箇様々ゝの快船ゆり朝良と由
充をうち載て。無ハ漢へ出せ。ぞ江を泗ぎて其船と曳綾さすく欲ゆ又十箇の

戰艦あり其艦毎ふ援の軍兵都て五三四百名るべ。朝良命運かくの如くヨヌく
援兵を沿くけるふ我身ふ人魚の奇莱ゆりとも隊兵們ハ然る准備る身単ゆ
甲斐ゆ。と思ひくしてひたと告るを小文吾うち咳て开ハ送憾ーかるべけれと大事ゆ
莅て大功ゆるも七八分ゆるを好ん。我毎今日の閑戰ふ則寄隊の副将る千葉
自胤と虜ふ捕らぶ又朝良ヨ敵ふ捕らぶ开ゝ十二分とゆるべ。物盈る時ハ必溢ふ
功ヨヌけれ禍ゆとを沿ぎ我ハ那由充ふ報恩を思ふ故ふ遂ふ朝良ヨ敵ふ漏せ
君ふ仕へく忠ゆる貳ゆるふゆゆ非如迂沿て那主僕を敵ふ果ゆも虜ふ做ゆ
恩ふ叛ふ人ふゆ況や我両館ハ其御ゆ大小とゆく都て仁義ハゆるを
然ゆて今敵ふ不義ふ功を功として愛く誉ゆ。鄙ふ義兄弟義任ふ那恩
人ふ撞見て旗の緒を射るゆ心ハ同ゆ我ハ馬を射て人を射ぎ俱ふ是私ゆ一
箭ハ猶已ふ勝れゆ。その義を思ひゆぎや。と諭ぜば重時感服して及ばずと稱へり。

然が是より後々まで大川大田が報恩の椿事を偽く美談とも。そが中に識者或は評して。那時莊介小文吾が。俱に舊恩を義の為に由充を射て殺さざりし昔唐山姫周の時衛の庾公之斯が。鄭の子濯孺子を射ざりし事と。又江尹商陽と陳弁疾が。呉師を追ひし事に似たり。且庾公之斯は師恩の為に輪を扣て金を去り。孟子離婁の篇に。莊介が鏃を抜て空前を蔑ひて。子濯孺子を射ざりし事。又江尹商陽は呉の雑兵三人を射て棄て。由充の旗緒を射る心操と相同し。又小文吾が由充と朝良の馬を射て斃して敢呉の將を射ざりし。礼記檀弓の下篇に。斃て敢呉の將を射ざりしと。相似たり。且義の仗る所和漢今昔君子の行ひ正に符合する如く。一揆なるべしと。間話休題却説大田小文吾は。満呂重時と其隊兵を皆相従へて。朝經俊故が北兵を戰ひ克て。両國河原に向ふ程に既に朝經俊故。北兵を皆殺散して。且逃るを追ふて

河原に向ふて。無数の篝火を焼せて。皆共侶に。小文吾と迎へけり。登時小文吾伴の両頭人の戰功を誉て。且朝良由充に援の兵船を多く載て漕去りし事の趣を告しに。朝經俊故隊兵憶ぶ俱に嗟嘆して由充を饒せども。朝良を漏せし恨を怨むとのみして。重時が徒と大田の意思を告るに及びて。大家感服なりけり。然ども其の時自家の與に軍師犬阪毛野胤智が豫計る所なりしを。小文吾は。重時朝經俊故も是を悟る者なりけり。并を甚麼と。原に始洲岸の陣営に。毛野が悄地に思ふ。行徳口へ寄隊の大將扇谷朝良千葉自胤に相従ふ加勢の隊長ヨリ下の中に大川大田の思人なる稲戸津衛由充も。それに。空しく由充倘朝良狡自胤の隊に附られて。戰に利なくて共侶に敗績に及ぶとも。大川大田が思義の與に。渝さへ敵を漏せしを。逆尋思して。則東峰崩三と鱧船

貝六郎に計策を授け。且雄兵三百餘名を率て。俱に悄地を市河に。大江屋
依仗許遣して。件の謀計を行せらる。崩三と貝六は則依仗に件の機密を
偽示して。俱にその事を料る程に既に十二月六七日の時候に逮りて。依仗は
同宿する舵工等と俱に豫隱し置る快船淺艦十艘有餘を率て。是に
貝六崩三と隊兵三百餘名を分ち載て。悄地に深川の畔に至る。俱に枯蘆の
中に駐れて居る。開戰の光景を覘ひ。果して八日に至て。寄隊敗軍に及び。こゝに其頭を
退て。走て両國河原に集て見るに。あの架する舫橋を守る扇谷の雜兵は。自
家の敗軍を傳聞て。逃て一人もなし。依仗これを便宜として。急て件の
舫橋を斷流し。又斷棄て。這首に舫一艘もなし。深川（今の隅田川の別名）
かり来て。復枯蘆の中に居る。偖而あの日朝良と由充が滿呂重時に酷く迫

て。深川に津を欲り。時依仗先快船を寄せて。件の主僕をこゝに載せ。
重時に依仗と認られ。偖而其船漕に至る時貝六崩三が戰艦又枯蘆の中
より漕出て。俱に朝良と由充をこゝに守りて。去りしあの時黄昏なりけれど。
重時は其戰艦に東峰鞘船を在るを認て。又滿呂と大田と隊兵を率て
あの岸を曉ぎ。由充も亦朝良もあの日の曛昏より天結陰りて八
日の新月影なき波上のと暗くて。投方安定なきれば只是援兵の艦なりけりと
思へのみ。其詰朝這諸船の安房の洲嵜に果るまで。身は是虜にせられて。
毫も知る由なかりけり。偖て荘仗と小文五郎の報恩の義を果さんとて。敢て其情況
傷るとなく。反て其別人を以て寄隊の大將を虜にせり。北兵加勢の頭人を。
由充さへに迎執りしは軍師智王の遠謀より出て。勝とを千里の外に決する段
あるあらびに誰か其機に先たちて這奇を呈する者あらん。看官さへに歎きて

あゝ至りく愕然と覺く巻を掩ふもあるべ。休題却説。大川莊介は其の日大石憲重が朝良を易く延さんとそ。死力を竭して戰ひくを敢又物ともせぬ滿呂再太郎安西就介その他勇士猛卒とりく息をも艱れぬ攻る程に初逃る寄隊の頭人宿尻城戸介萬戸月十字七八間九郎糸山五六並に憲重が一二の家臣菅蔬三布七関口小田八岸藻雜四郎なゞど喚ひ做せ兵毎返し合せ相拄えく。一雲妻時は挑戰ふのゝ心後れ癖あれば終に亦復伐破られくく或は數ゝ命を殞し或は逃亡く恥を見くらぬ既に〻く憲重が千騎が一騎に成るまぐもと屢士卒を罵励して馬上に鎗を打振々々近つく敵を突伏せく大雷然さる光武者の本事に中る者あらぬ莊介遥に是を見て怯ぬ馬を馳よせく憲重と鎗を交へく一上一下と術を盡せ大士自得の刃尖に憲重竟に爭ひ得ぬ。鎗を戛哩と反飛さまく大刀を拔んとせ〻程に莊介透さぬ鎗をとりく片頰を托地と撻しが憲重は横さまに馬より撞と打隊さまく一雲妻時は起もあがらしと安西就介滿呂再太郎俱に遥に是を見く飛が似くに走り来り折累りく鞦々と壓えく索を被ける。憲重虜に做りしが殘兵も皆逃亡くあゆも鬪戰果ぬけり。恁而大川莊介は五本松に陣営に退くて則太田が勝軍あくかへり来るを待んとも方僅其報あれば有徳り程に滿呂再太郎安西就介郷宮に虜にある大石憲重を大床の下に牽りく来く大川莊介。実檢を請ひくが莊介則諸士を將く出て発見に尻を撼く憲重と佐と見て石州憲重ふ汝は是鎌倉両管領の四家老の其第一老にく豊嶋大塚の城主なるに年来其悪を佐けてりく君の非を正さまく要せぬ剰丁田町進卒川菴八郎上社平軍木五倍二仁田山晋五なゞど喚ひ做しる奸虐の酷吏讒訴の佞人をのゝ親愛あく賞罰訓其道に違るを思はざりしは甚麼ぞや我髻歳くりし時逆

荘介鎗とりて
捷く且憲
重を生拘る

旅ゐ母を喪ひく。あの身の所由るくーぐ。當時大塚の御士長。大塚墓六ゲ小
厮ゐせーれく。年来他ゐ仕る程ゐ東人夫婦の讐敵と戴ゐく恩義ゐ報ひゐ。
汝い敢是を賞せぎ反く又那奸黨ゲ忠義を賊情とひ做せる誣言を信容
まく。我を罪まるゐ死刑をりく。あて法場ゐ牽れ。折幸ひゐて我義兄弟大塚
犬田大飼の救ひゐよりて萬死を免を且那寛家们を殺ーゐく。今日ゐ至まるを。
我倘里見殿ゐ未生の夙因ゐ。ぎーく。義兄弟ゐと共侶ゐ。今番の防御使を
奉らぎい言ゐ汝ゐ對面ーて舊怨を復ぎ日ゐ。ぁんや。夫一飡の恵ゐも。必報ひ睚
眥の怨ゐも必報ふい。志士の辭せざる所ゐあて勇者の本意とぎる所ゐ。ぎれども
我君里見殿ハ仁君ぺ。をりく。鄙ゐ犬田小文五ゲ妙見嶋の柵を拔ぎ時汝の
家臣彦別夜叉五と其隊兵百十數名を生拘りーゐ敢一人も殺さぎーて船ゐ載
せく流ーー遣りゐ。ぎれば今我も亦然ーも汝を憎ーとく。首を刎るゐ忍んや異

日安房へ凱旋の日ゐ命乞ーて汝さまべ。然でも陳ぎる義ありや。と問譴らぎて。
憲重ハ羞く答るとぎるぎ頭を低く跪居くを屢問れくやう。
栄枯龍辱地を易く。身ハ囚ゐ做りー今ゆゐ何ゐを陳ぎべ。実ゐ昨の
非を知るゐ足れり。後悔の外ゐ。幸ひゐく首を續れぎ。永く德澤を仰ぐ
べ。と謝まりて莊ゆゐ。満呂再太郎ゐ向ひくゐやう。汝ハ隊兵一百名を
ゐく。這生口大石憲重と。今井の柵へ牽りて。權且那里へ捕籠措くべ。
路次ゐ。日の暮れぎ。ヨヌく蕉火を准備せよ。その餘の小箇様ぐと言
詳ゐ吩咐れば。信重則憲重を推立せく退けく。躰て隊兵一百名ゐ。
守ゐまく路次ゐ。ぎれけり。偖而當晩四鼓の比及ゐ大
田小文五ハ。満呂重時。盾持朝經大樟俊故ゐ。二四隊の士卒を相從へ。
五本松の陣營ゐかく來ゐれば。莊ゐあれを労ふく勝軍の事の趣を詔問

然小文吾則小梅の戰ひに自亂を虜にして今井の柵へ追せしかバ並に落
柿八们を誅戮せし顛末を告て又尓後又朝經倭故が兩國河原を
朝良主僕を追伐し時稲戸由充の援兵あり姑且勝負あらざりしに由充も亦
重時ハ後よりして攻破られ那身ハ主僕僅に二人深川のかたに脱れゆく折我
又是を追蒐けしに其兩個の敵一人ハ恩人由充なりけれバ胡意一歩の路を
讓りて那舊恩に報ひしに他又入江の邊を逃ゆく満呂復五郎が一隊の爲に
趕逼られて免るべくもあらざりしに折から他の水軍の援兵あり其艦十
艘雄兵六七四百名許始に漕よせし一箇の快船に朝良と由充をうち
載なせて守りて漕去りぬと一五一十を解示せバ莊介も亦那水軍ハ自
家の士卒なるを悟らねバ駭嘆して原来敵に援兵ありて朝良を捕
ゑざりしハ遺憾なれども亦稲戸由充に報恩の第一義ぞ我

のミならず和殿さへ徳に報ふ年德とのぞまる。志を果せしハ実に迭の歡びに非如
朝良を漏しぬとも寄隊の副將自亂を和殿の隊に獲られしハ第一番の軍
功なるべし。這里にも亦閑戰の顛末ハ箇樣々々如此々々と云。今朝憲重の伏兵を
重時なぞて伐破らせし事の始より莊介が一隊をもて朝良を攻伐走らせて竟に大石
憲重を虜にせける事の終まで遺もなく報知されバ小文吾深く感嘆して本意あ
るかなと稱ける。恁而當晚ハ陣門に篝火を焼明し。猶且自家の刀瘡児を勦りて
其療治させる閑なきに既にして天の明しかバ莊介小文吾ハ随即地方の村正と故老等を
召て昨日より逃と兩國河原にて戰死なせる自家の士卒及敵の亡骸を聚集て其
四下なる寺院に埋葬なすべき旨を課するに皆なる退りて時を移さず猛可に其諸
邑なる莊客を聚合下知を傳へてよく其事を致しける有程に北兵先鋒の両
頭人妻有復六荻野井三郎ハ昨日兩國河原の鬪戰に北兵竟に敗績しく。那

文溪堂藏

身に創を負へり。ひたすら敵の頭人に組て刺んと思ふをもて。胡意倒れて斃る者の屍骸に交りて俯く在り。既にして稲戸由充に。朝良と共に僅に二騎辛く命を免れて。深川の方に落亡せり。士卒に斃られ或に逃去て。敵皆退陣をなす。其本意を遂ずして。故に復六と三郎に。倶に悄地に身を起す。當晩深川に赴く。由充の往方を覓るに。他に水軍の援兵有て。朝良と共侶に載て漕去りぬと云。其頭の民の噂を聞て。心安しとなる。次の日悄地に津を求めて。倶に武蔵へ赴けり。その他始より朝良に従ひ那隊の頭人入間九郎。松山五六等陣歿の時。えあり。又宿尻城戸伝萬戸月十字七及朝良の近習某甲某乙等に皆殘兵と倶に逃亡て。脱棄る甲冑。執送て大刀鎗のごとくして斃れ屍骸あり。稀に況里見の士卒の斃れに什が一を刀瘡に亦里見の君の殘に克殺を去て欲しあり。俊徳の致を所なるべしと。心ある人いひけり。介程に。

這葛飾の民毋に各各簞食壺漿を。五本松の陣営に来賀せざるなし。
乎が中に行徳塩濱並に鄰里近郷の民までも倶に小文五の故郷に相唱へて。
仰ぎて敬賀する者甚多し。始小文五吾莊に塩濱に在陣する時。大田と
相識る者とにて。寄隊大軍の中にて。其成敗を料り難て詰るに。
稀なりに今全勝の勢を見て。蟻に甘に就に似たり。一貫一賤交情を見
る。孤獨多福勢同じ。小文五に足を見て。嗟嘆する者敢受けず。其已
と云ざるに。東西を取せて選ける。畢竟大川大田両防禦使の全勝の戰
功に既に有に具なり。又洲崎國府臺水陸二所の鬨戰に自他の勝負
甚麻なり。其に漸次に後々の回まで解分るを聽か。
作者云。約這水陸二所の鬨戰の勝敗結果に皆是十二月初の八日なり。

同日の事ゝ然ども今詳ふ是を編次るふ及び。三所を駁雜して綴るゝ
もゆゝ。そのゝ。初ふ行德口る。二犬の戰功を具ゆ。畢て次ふ國府臺又
其次ふ洲崎の水戰を具ゆ。一戰終ゝ又一戰始るふゆゝ。俱ふ是同日の
事る。看官宜く照見るべし。蓋あの水陸大兵大戰の一舉ハ予が腹稿
二十餘年の今ふ至りゝ。一事も洩れ漏ることゝ。然ると人或ハ。まゝ結局大
團圓まで見せぎゝ。第四輯ふ約束ゆる予が洩れ漏せ欲そ。樂
人情をゝく。其書を作者ふ仕まゝ欲ゝ。驚馬ーゆゝ。ゝ礼をゝ。
其言忠告ふ似ゝとふとも。予何をゝ驚ん非除予が春憁壽る。まゝ老ふ
至ぎ。前ふ約束ゆる事を。ふゝ。ふーゝ亡忘るべ。鄙語ふ云細大流々落成を
見ゝ。漏ゆるゝべその時ふべ。其折鑄べ。

南總里見八犬傳第九輯巻之二十七終